

青山学院大学英米文学科

Ⅱ部 日本語による卒業論文の書き方

卒業論文は4年間に学んだ知識と研究方法の実践として書かれるものである。英米文学科の卒業論文としてふさわしい範囲でテーマを選び、そのテーマに関連する研究論文・資料等を検討したうえで書かれなければならない。卒業論文はあくまでも自分自身の主張や研究成果を発表するために書かれるもので、すでに発表された文献の引き写しや、その言い換え、もしくは継ぎ合わせに過ぎないものにならないよう十分に注意する必要がある。出典を明示せずに他人の学説や言い回しを借用し、自分のものであるかのように見せかけることは剽窃行為とみなされる。剽窃は重大な不正行為であり、評価「不可」を含む厳重な措置の対象となる。

論文作成はこの「日本語による卒業論文の書き方」に従う必要があるが、ここでは基本的なことのみを示している。詳しくは『MLA 新英語論文の手引き 第6版』（北星堂書店）やその簡略版 Joseph Trimmer, *A Guide to MLA Documentation* (Houghton Mifflin)等を参照したり、指導教員に問い合わせること。

進行スケジュール・モデル

	テーマの決定・第1次資料(研究素材)の入手と精読の開始
4月	履修登録(テーマと指導教員の決定)
5月	仮題目の決定・アウトラインの作成
6月	第2次資料(研究論文・研究書など)の収集と精読開始
8-9月	全体のアウトラインと章別のアウトライン作成
10月	題目とアウトライン(Projected Abstract)の提出(指導教員と教務課の両方に)
8-11月	卒業論文の執筆
12月	清書
1月	卒業論文を教務課に提出

必要な事務手続き

- (1) 卒論題目の提出(所定用紙を使用、本人印と担当者の承認印が捺印されていること)
提出期限と提出先 「講義案内」で日時を確認して、教務課に提出。
- (2) 卒論題目と日本語による Projected Abstract の提出
提出期日と提出先 「講義案内」で日時を確認して、指導教員に提出。
A4用紙1枚程度。30行 x 30字で頁設定。
題目・氏名につづけて、アウトラインを書く。
- (3) 卒論の提出
提出期限と提出先 「授業要覧」で日時を確認して、教務課に提出。

A タイトル等の付け方 (見本参照)

- 1) タイトルには、作家名・作品名、論文のテーマ名を入れること。
例 (文学系) 文学理論家としてのハーマン・メルヴィル
(語学系) 英語とドイツ語の不定冠詞
- 2) 副タイトルを付けてもよい。
例 (文学系) 文学理論家としてのハーマン・メルヴィル——『白鯨』における語り手の機能
(語学系) 英語とドイツ語の不定冠詞——歴史的考察
- 3) 卒業論文であることの表示
- 4) 論文提出者の氏名と年月の表示
- 5) 字体は明朝体などの鮮明な字体とし、大きさは14フォント、ゴシック体(太字)。

B 目次の付け方 (見本参照)

- 1) 中央に「目次」と記入。字の大きさは、14フォント(太字)。
- 2) 1行空けてから、「はじめに」もしくは「序」、1章(あるいはただ、1もしくはI)と書き、点線を付けて行右側に始まりのページを表記。章タイトルが2行になる場合、10スペースをおいてから書くこと。字の大きさは14フォント(太字)。

C 本文の用紙サイズ、行数と字数、余白、白紙ページ、製本

- 1) 用紙はA4サイズとする。
- 2) 1ページ30行、全角で30字とする。なお、英語は半角で入力のこと。
- 3) 用紙の上下はそれぞれ4センチ程度の余白をおくこと。
- 4) 用紙の左右はそれぞれ3センチ程度の余白をおくこと。
- 5) 最終ページの後に、白紙を1枚はさむこと。
- 6) 論文は製本もしくは厚手の穴あきファイルに綴じて提出のこと。

D 論文の枚数とページ数表示

- 1) 「はじめに」もしくは「序」から結論まで、本文の長さは最低23枚を目安とする。
- 2) 注と参考文献の部分は、本文の必要とされる分量に数えない。
- 3) ページ数の表示は右上肩に付けること。

E 本文の字体の大きさ

- 1) 明朝体等の鮮明な字体とし、字の大きさは12フォントとする。

F 書式 (章、セクションの配置、余白、行の字下げ、句読点等の後のスペース)

- 1) 各章は、前の部分との間に余白があってもページを変えること。
- 2) 各章の表示の後、2行空けてから本文を書き始めること。
- 3) 章の中にセクションを置く場合、その表示の前を1行空けてから本文を書き始めること。
- 4) パラグラフの最初は、1スペース空けてから書き始めること。

G 作家名、作品名、雑誌掲載の論文等の表記方法

- 1) 原則として、論じる作家名は最初に言及するとき、フルネームで書き、続けて生没年を表示のこと。2回目以降は、姓だけでよい。

例 ハーマン・メルヴィル(Herman Melville, 1819-91)
 シャーロット・パーキンズ・ギルマン(Charlotte Perkins Gilman, 1860-1935)
 カズオ・イシグロ(Kazuo Ishiguro, 1954-)

- 2) 論じる作品名は最初に言及するとき、作品の出版年を表示のこと。単行本となっていない場合等は、邦題の後にその英語タイトル、発表年を表示のこと。

なお、イギリスの短編、一編の詩等の英語表記は、シングル・コーテーション・マークで示すこと。アメリカ作品の場合、ダブル・コーテーション・マーク。

例 『白鯨』(Moby-Dick, 1851)
 「西風に寄せるオード」(‘Ode to the West Wind’, 1819)* イギリスの一編の詩
 「みずうみ」(“The Lake”) * アメリカの短編小説

- 3) 論文中で言及する単行本となっている長編小説、戯曲、長編詩、研究書、雑誌・新聞等の場合、二重括弧(『 』)で示すこと。
- 4) 論文中で言及する短編小説、戯曲集の中の一幕物、一篇の詩、雑誌掲載もしくは論文集に収録の論文等の場合、一重括弧(「 」)で示すこと。

例 単行本等の場合 『白鯨』
 短編等の場合 「西風に寄せるオード」、「みずうみ」

H 引用・言及等の出典表示の仕方

- 1) 文学系の場合、研究対象のテキストが1冊であれば、そのテキストのページ数のみを括弧()に入れて表示する。
- 3) いくつかの文献・テキストを利用する場合、それらの著者のラスト・ネームと該当するページ数を括弧()に入れて表示する。

例 グレアム・グリーンは『事件の核心』において、「絶望は不可能な使命は自らに課した者が背負うべき代償である」(Greene 50)と語ったことがある。

- 3) 同一著者の文献・テキストをいくつか利用する場合、そのタイトルの頭文字とページ数もしくはその発表年とページ数を括弧()に入れて表示する。

注 語学系の場合、「I 引用の仕方」の例2の書き方が一般的である。

例1 グレアム・グリーンは『事件の核心』において、「絶望は不可能な使命は自らに課した者が背負うべき代償である」(H50)と語ったことがある。

例2 チョムスキー(1972)によると、ミニマリスト研究の立場では「節は循環的に組み立てられている」(70)という。

- 4) 出典とページ数の表示は、引用・言及が本文中の場合はその末尾、文章の終わりであればピリオドの後にする。

I 引用の仕方

- 1) 短い引用は一重括弧(「 」)で、地の文に組み込むこと。目安は3-4行以内の長さのもの。詩・戯曲の場合、スラッシュ / で行が変わることを示す。
- 2) 長い引用の場合、行始めを4スペース空ける。なお、引用個所がパラグラフ冒頭か

- らの場合は、5スペース空けること。どちらの場合も、括弧は付けない。
- 3) すべての引用の後には、出典・ページ数、行数、幕・場を表示すること。
- 4) 引用文の一部を省略する場合はナカグロを6個(……)付けること。

* 以下の引用例はすべて、パラグラフ途中での引用例として提示。

例1 短い引用(文学系)

グレアム・グリーンは『事件の核心』において、「絶望は不可能な使命を自らに課した者が背負うべき代償である」(55)と語ったことがある。

注 (55)は、使用した『事件の核心』の英語版テキストのページを示す。

例2 短い引用(語学系)

チョムスキー(1972)によると、ミニマリスト研究の立場では「節は循環的に組み立てられている」(70)という。

注 「チョムスキー (1972)」は、チョムスキーの1972年発表の論文もしくは研究書を意味し、引用の後の(70)はその文献の70ページを示す。

例3 詩・戯曲(短い引用)

ジュリエットが帰ろうとしたとき、彼女は「さようなら、おやすみなさい。別れがこんなにも甘く悲しいものなら、/ 夜明けまでおやすみを言い続けているわ」(II: ii, 20-21)と語るのだった。

例4 詩・戯曲(長い引用)

アメリカ詩人ロバート・ブライは自作の詩「トウモロシ畑にキジを撃ちに来て」の冒頭で、奇妙な体験をこう語っている。

広々とした野に立つ一本の木のなにかがこんなに不思議なのだ。

一本の柳の木。ぼくはそのまわりをぐるぐるとまわる。

ぼくの身体は変に引き裂かれ、この木から離れられない。

とうとうぼくはその下に座り込む。(1-4)

ここでブライは、ある一つの場所とそこに立つ本来ありふれた柳の木と出会うことで、無意識に自然と人間のつながりを感じ取った体験を語っている。

注 (1-4)は、引用した詩の行数を示す。引用は行始めから4字下げる。次の「ここでブライは……」の部分を1字下げてあるのは、パラグラフの始まりを示す。

例5 長い引用(引用個所がパラグラフ冒頭なので5字下げ。中略もある場合)

冒険小説の系譜について、マーガレット・フィシャーはこのように考えている。

イギリス小説の流れを論じた研究書¹において……ジョゼフ・コンラッドのみがフィールドイニングからヘンリー・ジェイムズ、さらには現代にいたる作家たちと同様、伝統的な意味における冒険小説の書き手と考えられるようになってきた。(Fisher 30)

この言葉は、コンラッドの文学を再評価するとききわめて示唆に富むと言えるだろう。つまり、彼の海洋小説をイギリス冒険小説の系譜に位置付けて考察するということである。

注 「研究書」の右肩の数字1は、論文末尾の「注」の通し番号の意味。

(Fisher 30)は、Fisherの著作の30ページを示す。また「この言葉は……」

の部分で1字下げているのは、パラグラフの始まりを示す。

J その他の引用・言及の示し方

- 1) ある文献を自分でパラフレイズしたり要約したりして利用する場合、必ずその出典を明らかにすること。
- 2) インターネット等で文献を利用した場合、その出典を示すこと。

K 注の付け方

- 1) 注は本文では言い尽くせないコメント、説明、情報を提供する場合、文章等の形で記述する。
- 2) 本文の該当個所の右上に注の通しナンバーを付ける。
- 3) すべての注は巻末にまとめる。

L 書誌の付け方 (見本参照)

- 1) 参考文献は、本文と注で引用・言及した文献・テキストのみとする。
- 2) 文学系・語学系とも、用紙中央に参考文献と表示すること。
- 3) 著者のラスト・ネームのアルファベット順に配列する。なお、日本語文献は「あいうえお順」に配列し、外国語文献の後に記載すること。翻訳書の場合、原著者名に続けて訳者名を入れる。
- 4) ラスト・ネーム、ファースト・ネーム、書名、出版地(外国語文献の場合)、出版社、出版年の順に書き、最後にピリオドを付ける。なお、語学系では、姓、名、出版年、出版地、出版社の順に書き、最後にピリオドを付ける。なお、2行になるときは、2行目は5スペース下げること。日本語文献の場合、3字下げる。

例 文学系 Hunt, Peter. *Theory and Practice*. Oxford: Oxford UP, 1999.

注 UPの個所は、University Pressと書いてもよいが、このように省略して使用してもよい。

例 語学系 Hunt, T. (1993). *English Grammar*. New York: Arnold Press.

- 5) 雑誌の場合、姓、名、雑誌名、巻数もしくは号数、ページ数を付ける。

例 文学系 Garber, Frederick. "Pastoral Spaces", *Texas Studies in Literature and Language* 30, 431-60.

例 語学系 Haiman, J. (1980). "The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation." *Language* 56, 516-40.

- 6) 同じ著者のものが複数ある場合、姓名のところにハイフンを3個とピリオドを付け、タイトルのアルファベット順に配列する。
- 7) 複数の著者・執筆者・編集者の場合、最初の1人はラスト・ネーム、ファースト・ネームの順とし、2人目からはファースト・ネーム、ラスト・ネームの順とする。

例 Anderson, Lars and Peter Trudgill. *Bad Language*. Oxford: Basil Blackwell, 1990.

- 8) 日本語文献の場合、原題を書いた後、[]の中にその英訳題名を書く。

例 島田雅彦『彗星の住人』新潮社、2000年。 [*Inhabitants on the Comet*]. Tokyo: Shinchosha, 2000.

(卒業論文の表紙)

2010 年度

青山学院大学文学部第二部英米文学科

卒業論文

文学理論家としてのハーマン・メルヴィル

——『白鯨』における語り手の役割

青山太郎

2011 年 1 月

(卒業論文の目次)

目次

はじめに	1
1章 『白鯨』の背景	3
2章 『白鯨』に見られるアイロニー	10
3章 『白鯨』の構造と技法	17
4章 観察者としての語り手	23
結論	29
注	32
参考文献	33

(文学系の参考文献)

参考文献

- Abbey, Edward. *Abbey's Road: Take the Other*. New York: E. P. Dutton, 1979.
- . *Desert Solitaire: A Season in the Wilderness*. New York: Simon and Schuster, 1968.
- Austin, Mary. *The Land of Little Rain*. 1903. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1974.
- Berry, Wendell. "A Few Words in Favor of Edward Abbey." *Resist Much, Obey Little: Some Notes on Edward Abbey*, ed. by James Hepworth and Gregory McNamee. Salt Lake City: Dream Garden Press, 1985. 9-19.
- Buell, Lawrence. "The Thoreauvian Pilgrimage: The Structure of an American Cult." *American Literature* 61.2 (May 1989): 175-99.
- Lyon, Thomas J., ed. *This Incomperable Land: A Book of American Nature Writing*. Boston: Houghton Mifflin, 1989.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Idea in America*. New York: Oxford UP, 1964.
- イザベル・ホランド、片岡しのぶ訳『顔のない男』(富山房、1994年) [*The Man without a Face*]. Tokyo: Fuzambo, 1994.
- 島田雅彦『彗星の住人』(新潮社、2000年) [*Inhabitants on the Comet*]. Tokyo: Shinchosha, 2000.

(語学系の参考文献)

参考文献

- Baker, Mark (1997). "Thematic Roles and Syntactic Structure," *Elements of Grammar*; ed. by Lilian Haegeman, 73-137. Dordrecht: Kluwer.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge: MIT Press.
- . (1998). *Language and Problems of Knowledge*. Cambridge: MIT Press.
- Fodor, J. A. (1975). *The Language of Thought*. Cambridge: Harvard UP.
- Jenkins, L. (2000). *Biolinguistics: Exploring the Biology of Language*. Cambridge: Cambridge UP.
- Newmeyer, F. J. (1992). "Iconicity and Generative Grammar." *Language* 68:756-96.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 影山太郎(1987)「モジュラー語形成論」『英語青年』第133巻、第7号、314-18. ["Modular Word Formation." *The Rising Generation* 133: 7, 314-18].
- 中野弘三『英語法助動詞の意味論』(英潮社、1993年) [*Semantics of English Modal Auxiliaries*]. Tokyo: Eichosha, 1993.
